



▲須崎まちかどギャラリー（旧三浦邸）



▲須崎未来塾



人材育成やアートイベントで 地域の価値を創造する 高知県須崎市のまちづくり

津波避難場所となる城山公園の
アートイベント

人材育成塾やアートイベントを通じたまちづくり

高知県須崎市では、人材育成塾やアートイベントを通じて、地域の価値創造に向けた取り組みを行っています。須崎市役所元気創造課の有澤聡明さん、NPO法人暮らすさきの大崎緑さんにお話を伺いました。

何もない須崎市

須崎市役所元気創造課では、地域おこし協力隊、集落活動センター、移住定住促進、すさきまちかどギャラリー、須崎市マスコットキャラクターのしんじょう君、空き家の活用、ふるさと納税、人材育成などの業務を所掌しています。須崎市はかつて財政状況が全国トップクラスで悪い自治体で、「何もない須崎市」と言われていたこともありました。最近では、ゆるキャラグランプリ2016で優勝した「しんじょう君」による広報や、「鍋焼きラーメン」の名物のほか、人材育成やアートイベントなど、盛り返していくための様々な活動を行っています。

人材が活躍する仕掛けづくり

須崎市のまちづくりの特徴的な取組の一つとして、「須崎未来塾」が挙げられます。「須崎未来塾」は、楠瀬耕作市長が就任したときに、市長の肝入りで行われた人材育成の取組です。愛媛大学元教授の森賀盾雄先生が塾長となり、これまでに5年5期で、62名の修了生が出ました。須崎未来塾では、講義やフィールドワークのほか、最終日に参加者が「今後こんな活動をしていきたい」という発表します。人前で「こんなのをやりたい」、「あんなことをやりたい」と話すことにより、それぞれのメンバーが一步踏み出せるきっかけになるところが人材育成の一番良いところだと思っています。未来塾のメンバーのやりたいことをお互いに知っている状態になり、「それだったら私、手伝うよ」など、今までなら、一人で考えて終わりだったことが、人材のネットワークができることで具体的に実現されていく環境ができるようになります。

インタビュー

須崎市役所 元気創造課

元気創造係長 有澤聡明さん
高知県中土佐町出身。2004年須崎市役所入庁。元気創造課で須崎未来塾をはじめ、様々なイベントに携わる（写真左）。

NPO法人 暮らすさき

事務局長 大崎緑さん
高知県須崎市出身。高知市内の住宅メーカーの勤務を経て、2011年から、NPO法人暮らすさき事務局長（写真右）。



ました。未来塾自体は昨年度までの5期でいったん一区切りしましたが、現在は、これまでに未来塾に関わった人で、「未来塾同窓会」という組織を立ち上げ、地域人材のネットワークを継続させていく仕組みづくりを、試行錯誤しながら進めています。

アートイベントと空き家・空き店舗の活用

須崎市では、高速道路の県西部への延伸整備に伴い、様々な地域資源を活用して須崎の魅力を知ってもらい、交流人口を増やし、まちに賑わいをもたらそうという構想の一環で、2010年に、「すさきまちかどギャラリー（旧三浦邸）」がオープンしました。旧三浦邸は、1916年頃築といわれる塗屋造りの建物で、「高知を代表する商家建築」と評されています。三浦家は、江戸末期から続く商家で多岐にわたる事業を手掛けて須崎市の発展に大きく寄与してきました。この建物を、須崎市が譲り受けたときに、「アートや文化的なアプローチでこれを



▲▼上原八蔵邸の改修前（上）と改修後（下）



▲内装塗りのワークショップ



▲上原八蔵邸（改修中）の建物内

▲上原八蔵邸でのアートイベント



▲須崎まちなかギャラリーや、空き家・空き店舗などの地域資源を活用したアートイベント

建物について、須崎未来塾の1期生であり、移住促進の活動を行っているNPO法人「暮らすさき」事務局長でもある大崎緑さんが、須崎未来塾の最後に、「買い物難民対策のちよっとしたものを売るとゲストハウスをやりたいです」と発表されました。また、この建物は同時期に、アーティスト・イン・レジデンスの作品の展示会場としても活用されており、「この建物を使えたらいいよね」という機運が高まり、市が10年間借り上げることになりました。

改修は、900万円という限られた予算で行われましたが、「予算が足りなかったらワークショップしたりいいやん」という話をいただき、柿渋塗りと内装の漆喰塗りは実際にワークショップをやりました。これまで須崎未来塾などの取組を通じて、地域活動に意欲のある人とのネットワークもあったので、「まちの人に呼びかけたら人は集まるだろう」という自信もあり、職人さんに教わりながらみんなで内装を塗りました。

活用しようじゃないか」という話になり、現在では文化交流施設として活用されています。

須崎市では、この建物を中心に、「アーティスト・イン・レジデンス須崎（現代地方譚）」というアートイベントを2014年から毎年行っています。

アーティスト・イン・レジデンスとは、芸術家が須崎市に一定期間滞在し、住民との交流、地域資源の活用に取り組みながら作品制作を行い、その成果を展示・発表するプロジェクトです。1回目は、作家さんがまちなかギャラリーで作品をつくっている状態も公開しながらやりましたが、2回目以降からは規模を拡充して、まちなかギャラリー周辺に点在する空き家・空き店舗を、アーティストの滞在拠点や展示会場として活用するようになりました。アートイベントで空き家・空き店舗を活用することはとても有効だと思っています。実際に、アートイベントで作品展示を行う際に空き家や

空き店舗を使うことで、建物の内部がいろいろな人の目に触れて、それがきっかけでアートイベントで活用した物件に入居が決まる事例も、これまでに3軒ほど出ています。これまでに30名以上のアーティストがこの地域に滞在し、地域住民との交流を深めてきました。アーティストのユニークな活動を目の当たりにすることで、街に活気が出てきます。人材育成のプロگرامと同様に、アートイベントに関わる過程でそれ自体が地域の人材育成になっていっていると思っています。

ポロポロの家をみんなで直した経験が自信になる

須崎未来塾や、アートイベントが、空き家の活用やまちづくりにつながった事例として、「上原八蔵邸のプロジェクト」を紹介します。この建物は元々「シェーン」というジーンズショップで、数年前から空き店舗になっていたのですが、この

上原八蔵邸は、「菓子店」・「ゲストハウス」として、2018年4月にオープンしました。ポロポロの家をみんなで直したという経験を通じて、「何事もやる気さえあったら何とかなるな」、みたいな自信がものすごくつきました。

課題解決と価値創造

「課題解決」という考え方は、真面目でしんどいという印象もあります。どうやって価値を生むかを考える「価値創造」というスタイルで、楽しみながら活動できる人材のネットワークが充実していったときに、まち全体がおもしろくなると思っています。

まちづくりのポイント

須崎市の事例は、人材育成塾やイベントを通じて、行政と地域活動に意欲のある「何かやりたい人」がつながっており、企画立案や事業実施に活かされていることが特徴的と考えられます。